

論文

識字とパフォーマンスの間

The complicated relations between literacy and ritual performance

中林 伸浩

元桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部
(金沢大学名誉教授)

(2018年3月17日 受理)

識字 (literacy) とは、一般にヒトの文字使用の能力を指す語であるが、その影響力の大きさから、その意味するところが論者によって大きくずれるということがある。ある識字論の冒頭につきのような文章があった。「識字とはなにかと問うことは、大方、識字というものをいかに理解するか、ということだ。ある人々にとっては識字は技術である。他の人々にはそれは認知的影響である。さらに他の人々には、一連の文化的関係である。さらにまた他の人々にとっては、経験をきちんと思考し、再考することだ。識字は複雑な現象である」。識字とは、読み書きの技能であり、心理学上の問題であり、文化・社会制度であり、また科学・哲学・文学の思考様式でもある、と言い換えてもよいだろう。

筆者はこれまでジャック・グディの議論を援用して、制度としての識字という観点から「宗教」とか「政府」を考えてきたが、グディを含めて、識字論はもともと口頭伝承と文字文芸の対照からはじまった。以下は、これまでも多く議論されてきた口頭と識字との関係を、「識字」の多義性に留意しつつ、パフォーマンスの観点から筆者なりに整理しようというものである。

筆者の調査した西ケニア・ルイア地方の一部で、埋葬の三日後に特別な演説が行われている。それはブクス人によってクムセとよばれ (khusalwa kumuse、クムセを演じる)、有力な男性長老の死を機会に、かれの功績をたたえ、あわせてブクス人の来し方を振り返るというものである。現代的演説は別として、このような伝統的な演説というのはアフリカのどこにでもあるわけではない。筆者は一回だけこれに参加したのだが、その型にはまったパフォーマンスは、筆者がそれまでの調査地 (ブソガ、およびイスハ) では見たことのないもので、強い印象を受けた。それは確かに、普通の会話のパターンに近い現代の葬式の場の挨拶とはちがっていた。またおなじパフォーマンスといっても、村の中にいるセミプロの楽師たちの演奏とも当然ちがっていた。そのときの録音を起こして現地の助手に英訳してもらったものがある。(Nakabayashi 1982) クムセ一般については現地研究者の著述もあり、これらを参照すると、かなりのことが分かる。

死者は、1981年当時この地域出身の国会議員の父親という、知名度のある老人だった。

呼ばれたクムセの演者は、マルティという名で、死者と同年代の老人だった。彼が埋葬された墓の場所（死者の敷地内）に着いたのは午前8時半ごろで、すぐに場の設定をした。といっても、中央に8メートルほどの小道（これをクムセという）を踏みならしてつくり、そのまわりに400名ほどの聴衆を男女別に丸く座らせ、喪家の人びとの席を指示するだけである。マルティ氏は演説の間じゅうこの道を、かなりの速足で往復をくりかえすのである。かれの話は短いことばをくっきりと発声し、時として聴衆に質問を投げかけたり、出席者の個人名をあげたりして、聴衆との交流をたもっていた。歩くことと、話すこと以外の身ぶり手ぶりはほとんどない。手には杖をもっているし、洋服の上からは伝統的衣をあらわす、しるしだけの毛皮をつけている。つけていた特別の腕輪をふくめて、これらすべてが、クムセの演者というのが、この平等主義的社会ではもっとも権威ある人物であることを示していた。

演説の内容であるが、人にとって死はまぬがれえないもので、それは「神」によって準備されたものだという、クムセの主要なテーマのひとつから始まった。その含意は、死が人のせい（邪術）だとか、邪悪な霊によるものだという噂を抑えるところにある。特徴的なのは、この神をはじめ、アダムとイブや、エデンの園の蛇など、旧約聖書の創世記によって人の死の由来を説明していることだ。これはもともとあった死の説話を、聖書の話にとりかえた形跡があった。クムセの演説は、見かけの伝統性にもかかわらず、つねにその時々々の情報と生活にと共にある。それはクムセの終りの方では、喪家の人びとに死者の借財の返済や、今後の生活のアドバイスがなど、実際の事柄が含まれることと適合的である。人の宿命ではじまったマルティ氏の演説は、神の力の偉大さに触れたあと、クムセの主要テーマであるブクス人の歴史とアイデンティティを強調する挿話や慣習にかなりの

時間をかけた。ブクス人が現在の場所まで来た経路や、周囲の民族との戦争の事例をあげ、続いてイギリス植民地軍との戦いなどが語られた。眼目は戦いの単なる勝ち負けではなく、リーダーを中心に勇敢にたたかったブクス人の部族的形成と統合の歴史である。それはかれらの慣習、特に男子割礼（女子割礼はない）と、それで組織される年齢組の話は念が入れられる。

マルティ氏の約1時間半の演説で、半分以上を占めたブクス人の歴史やその慣習（特に氏族について）の部分は、いわゆる「口頭伝承」あるいは「口頭文学」(oral literature)の部類に入る。こうしたものが識字的文芸とどう違うか、あるいは同じかという問題がこれまで多くおこなわれてきた。日本でも民俗学の主な対象がフォークロア、つまり「民間伝承」であることでもそれは想像できる。アフリカの場合は伝統的な非識字的な社会（あるいは前識字社会）における種々のパフォーマンスが、識字的西欧文化の侵入によって記録され、観察されるようになると、同様の議論が起きた。例をあげれば、グディは西アフリカ調査地でバグルという長大な唱えごとを長期にわたって記録し、口頭伝承の性質に言及している。またルース・フィネガンは古代ギリシャとアフリカの口頭伝承全般の比較的考察をしている。識字論の泰斗、ウォルター・オングは、声の文化 (orality) と文字の文化 (literacy) の心性の違いという、高い見地から議論をしている。この三者は力点の差はありながらも、非識字的伝承が識字的文芸とは大いに異なるという点では、おなじ立場にある。そこでまず彼らの論点をあげながら、クムセの分析を試みたい。

この三人の中では、オングが文学や詩の識字性を特に強調することで知られている。文字に依らない口頭「文学」があるなど言うのは、「馬を車輪のない自動車だと考えるようなものだ」とまで言う。テキスト化された

文学は、原初の口頭的な物語りや詩は文学とは根本的な違いがあるだという。その理由を彼はいくつも挙げているが、根本的なことは、音声中心、いいかえれば聴覚中心の文化は、文字に慣れ、視覚に偏った現代人には、想像できなくなったほどに異なるという彼の認識である。視覚が対象を外側から切り離して認識するのに対し、聴覚の対象である音は空間の内部に充満したり、物の内部から発生する。こうした彼の「視覚は分離し、聴覚は合体させる」という一般論から、文字の文化の記憶に対して、声の文化における記憶は「内部的」であるという。記憶法としては格言やきまり文句といった定型が特徴的であり、その思考は冗長的、ないし多弁的だとか、声の文化は感情移入的、あるいは参加的であるといった、おおまかな特徴づけがされる（オング 1992）。筆者としては、聴覚と視覚が別々に働くとする知覚論に疑問もあるが、文字化された「文学」は前識字社会の口頭的演芸とは根本的な差があるという点は同感できる。

実際の調査にもとづいたグディの識字論は、より具体的である。グディの初期の論文（Goody & Watt 1963）での論点のひとつに、音声にのみ依っている文化には「恒常性」（homeostatic）を維持する特徴がある、というものがある。文化的価値が対面的にしか伝達されない。記憶の量的な限界があり、忘却によって知識の蓄積が少ない。記録に依る過去の分離がないので、歴史はつねに現在としてある、あるいは神話と歴史の融合がある。こうしたことは、昔から「有史」と「有史前」の区分として言われてきたことだ。ただ「恒常性」というタームから分かるように、20世紀半ばの構造機能主義の立場を表明したのものである。この立場に立つならば、たしかにクムセも演者の社会的な権威性から始まって、ブクス人のアイデンティティを男子割礼にもとめるというジェンダー的偏向など、社会的恒常性への維持傾向は見てとれる。一方、グディは20年にわたるバグルの調査か

ら、演者が代るにしたがって内容の入れ替えが行われ、固定したバージョンというものが成立しないなど、更新と「構造的忘却」の反復という口頭文芸のダイナミックな側面を強調している。筆者もマルティ氏以外のクムセの記録を読んだが、演者による構成と内容の差異は歴然としていて（そもそも上演時間は決まっておらず、場の雰囲気と天候などの状況次第である）、この点ではバグルと同様である。こうした前識字性を識字性と対照して「恒常性維持」と見るか、オングのように「声の文化は保守的ないし伝統主義的」と常識的にまとめるかは、大きな差ではない。

マダガスカル島の社会人類学的な調査・研究で知られるモーリス・ブロックは、異なった立場から上記のジャック・グディの識字論を批判している¹⁾。彼が拠って立つのはメリナ人社会の口頭言語文化のひとつである演説の事例である。時は1984年、あるマダガスカル歴史討論会によられたアーサー・ベシという著名な知識人でもある政治家は、15分の予定が2時間ちかくも長広舌を振った。聴衆である歴史学の関係者たちは、話が予期していたものと違ってはいたが、この地の演説の伝統であることは承知していて、とにかく傾聴していた。では、その内容とはどんなものだったか。ブロックは次のような説明をしている。ベシ氏は聴衆である歴史家たちが、自分を同じタイプの知識人として認めていないことをよく分かっていた。そこで自分が何ものであるか熱弁をふるったのである。自分は外交官として海外でも活躍したこともある、各方面に名の知れた政治家である。したがって多くの有力者の知己から、あるいは今は亡き長老から多くの話を聞いてきた。つまり駆け出しのアカデミックな学者と違って、実地の経験を重ねたうえで、祖先からの知識をうけついで権威があるというのだ。自分は多く手記も書いてきたが、自分こそこの地の歴史を書く資格があると。しかもベシ氏の演説はカベリーという、長老的権威をもった者独

自の型をもった話し方であった。この演説の型は実際に歳をとらなければ使えない話法である。というのは若いうちはカベリーに適さない「湿った」体であり、歳をとって「乾いた」体になるにしたがってそれが可能になるからだ。そして究極の「乾燥」が死者・祖先だという世界観によって、カベリーは祖先の恩恵の表現形式なのである。ベシ氏が歴史を語り、歴史を書くのは祖先に近いからであり、祖先のためなのだ。

さてここからブロックが識字についてひきだした結論は次のようなものである。以下に順に解説してみよう。

- 1、ベシ氏のような識字人が話すカベリーのような話法は、グディが指摘したような原初の口頭言語（つまり前識字言語）の特徴をすべて備えている。
- 2、識字はマダガスカルの伝統的知識のあり方を転換しなかった。逆にそれを確認した。
- 3、識字はグディがいうような知識の社会的解離（desocialization）を起こさなかった。したがって識字は社会の民主化を促さなかった。（Bloch 1998, chap.10）

クムセのマルティ氏とはちがって、このベシ氏は当時の最高のインテリ、つまり識字人である。ブロックはベシ氏のカベリーという伝統の様式に則った演説を聞いて、識字はマダガスカルの口頭言語文化に影響しなかったと言っているのだ。筆者は基本的にこれに賛成できないが、この三点は考えるべき問題を提出していると思う。

その第一点は、ベシ氏はたしかに識字人ではあるが、彼のバックグラウンドにはまだ前識字的な文化があり、その影響下にあったと考えた方がよい。今の日本のような「文盲」がほぼ消滅した近代的識字社会（大量機械印刷、プリント・キャピタリズム、公的学校教育、マスコミ）以前の識字社会は、一部の支配的な識字人と、大半の非識字人からなる、「半識字社会」とよべる状態であった（たと

えば、識字文化が流入した古代から江戸時代までの日本）。こういうところでは、R. レッドフィールドのいう「大伝統」（学者、僧、教師、官僚が担う識字文化）と、それに影響をうけながらも独自の農民的・庶民的な非識字的文化である「小伝統」（つまりフォークロア）の分裂と対照がある。マダガスカル島には数世紀のアラビア文化のごく表面的影響があり、その上に19世紀末のフランスの植民地統治による本格的な識字化が始まった。ベシ氏のカベリーは、実際は伝統性だけでなく、識字性が組み合わさった、半識字的な文化を形成したと考えるのがよいと、筆者は考える。したがって、ベシ氏の長老独自の話法、祖先の恩恵の誇示などの伝統は、半識字的文化の一部として、彼の識字的な教養と両立するのだ²⁾。

こう考えると、ベシ氏についてのブロックの第二点、「識字はマダガスカルの伝統的知識のあり方を転換しなかった」というのは単純すぎることになるだろう。つづいて彼が「逆にそれを確認した」とする点はどうなるか。筆者ならばこれを、識字時代における独特の反識字的な思想・行動のひとつとして理解できる。ベシ氏が西欧的な識字人である聴衆の歴史家たちへの対抗心がそれを示している。前識字社会が（半）識字時代へと移行すると、その中から文字文化に違和感をもつ人びとが出てくる。西欧の識字論者がよく引き合いに出すのは古代ギリシャのプラトンである。彼はいうまでもなく立派な識字人であるが、それでも文字文化に対して不信をしめすソクラテスを持ち上げるのである。オングも、プラトンが『パイドロス』の中でソクラテスにいわせていることとして、次のようにまとめている。1）現実には精神の中にしかありえないものを、精神の外にうちたてようとする点で、書くことは非人間的である。2）書くことは内的な記憶を破壊する。3）書かれたテキストは、なまの人間と違い、疑問に対してなにも応答してくれない。4）話される

言葉は、非難に対してみずからを弁護できるが、書かれたテキストはそれができない（オング 1992：168-9）。これを一言でいえば、書かれたテキストが、生きた人の言葉の現場とは別個に、独立して存在するという事実に対する違和感である。

ベシ氏が近代的なアカデミシヤンの歴史に反感をもったのは、かれらの識字的に輸入した西欧の歴史観が、みずから体現してきた伝統的な歴史観に抵触すると感じたからだ。それは生きた祖父たちから直に言葉によって伝えられたものだった。それはまさに、「疑問があれば質して、答えてもらった」ものである。それでもベシ氏はみずから歴史を書くと言っているのに、矛盾的存在であるが、多くの著述を残したプラトンもその点では同様である。考えてみれば、ソクラテスにかぎらず、孔子やブッダやイエスマムハンマドといった「教祖」たちは、（半）識字社会であったにもかかわらず、みずからは書き残すことはなかった。宗教の生成期には書き物への無視や反感が主力になるようだ。現代でも場合によっては似たようなことが起こる。筆者は以前、「真光」の教祖、岡田光玉が「言霊」という古来の概念を彼なりに拡大して、漢字の読みを勝手に変えたり、漢字の構成要素をバラバラにして使うなど、文字の優越性の否定、あるいは文字への敵意ともいべきものを顕わにしていることを論じた（中林 1993）。あるいはアフリカで筆者が見た「独立教会」諸派は、西欧キリスト教とその聖書を受け取ったが、彼らはキリストによる贖罪という、いかにも識字的な救済理論よりも、聖霊への憑依という身体化による救済の方を好んだ（中林 2009）。

前識字的なマルティ氏の演説と、半識字的なベシ氏の演説を、パフォーマンスの観点からさらに検討してみよう。R. フィネガンは、アフリカなどの前識字社会の「口頭文芸」の諸特徴は何かということを考えるときにまず

確認すべきは、それがパフォーマンスであるという事実だということ。口頭文芸が実現されるには、演者による実際の上演がなければならない。書かれたものの創作は基本的に一回限りであるが、口頭文芸は毎回の上演と創作が分かちがたく結びついている。ということは、口頭文芸の創作は普通に考えられているように、発せられる言葉だけではない。身振りも、衣装も、身体の装飾も、それと切り離せない。さらには、マルティ氏のクムセのように、聴衆との掛け合いがあれば、それもまた含まれるわけだ。フィネガンは、演者が何を言うか、だけではなく、何を言わないか（つまり眼前の聴衆の気分を損ねること）もあることをしっかり指摘する（Finnegan 1970: 4-11）。

口頭文芸のパフォーマンスや即興性を重視するフィネガンが、そうしたものがテキスト化された文学よりも、アフリカのダンスや音楽に近い、というのはもっともである（ただ、口頭文芸が文学と根本的に違うというオングのような説には反対するが）。音楽学者のクリストファー・スモールは「音楽はパフォーマンスのなかでしか存在しない」（これを彼はミュージッキングとよぶ）という観点から、楽譜中心の西欧クラシック音楽の特異性を分析している。最初は演奏のための心覚えに用意された簡単な楽譜も、五線譜の完成とともに、「作曲家」が出現した。ここに作曲家と演奏者の分化がおり、「今日のコンサート・ホールや録音時の演奏を特徴づける、作曲家の意図通りの音に対するしつっこい忠誠」（スモール 2011：225）が要求されるようになった。当然これは、聴衆の参加を妨げることとなり（静聴するだけの聴衆）、演奏者とのあいだに見えない壁（つまり演壇）が築かれるようになった。こうしたことは、口頭文芸のテキスト化とよく似た、音楽の識字化として捉えることができるだろう。この両者は、音声を記号によってリニアに記述する点で同じである。もっとも興味ある違いもある。ベートーベンの総譜を見るだけで、彼の交響曲を楽しむことはできないだろうが、文学作

品は目で読むだけで味わうことができる。それだけ文字化されたテキストは独立した意味的存在である。

それでは、文学作品を読み上げるようなパフォーマンスはどうであろうか。ブロックは彼の識字論を補強するつもりで、次のように言っている。「書かれた文書を読み上げることは伝統的演説者を聞くことと全く同じである。書かれたことは大体において、言われたことと同じである」(Block 1997: 160)。しかし、これには賛成できない。むしろ前述の、作曲家と演奏者の関係を当てはめた方がよいだろう。書き手(作曲家)と読み手(演奏者)の間の主従関係、読み手(演奏者)による即興や作品の変更への禁止、聞き手(聴衆)が参加することの拒否、テキスト(楽譜)の保存と再検証可能、等々。つまり、ブロックの言とは裏腹に、識字は知識の質を変えるだけでなく、パフォーマンスの質もまた変え得るのだ。この観点からいうと、やはりベシ氏の演説には識字的といえる特徴が見える。話題を歴史学という知的専門性に特殊化して、ひとり壇上から長広舌を振るう演説者と、それを静聴する聴衆というのは、まさにクラシック音楽会の構造である。これに対して、マルティ氏の権威はあらゆる面で、住民の葬式という儀礼的脈絡に組み込まれている。これを前識字的社会における政治と儀礼が分かちがたく脈絡化されたパフォーマンスという風に筆者は考えるのだが、特にそのなかで注目したいことがある。

それはマルティ氏のパフォーマンがさまざまなタブーによって囲まれているという事実である。クムセの演者は次のようなルールを守らないと、彼自身の身に災いが降りかかる。前夜は性交渉できず、当日の道行きで誰にも挨拶できないし、また誰も彼には挨拶しない。演技中、ツバを飲み込んではいけない。もしそうしたら、ただちに吐き出す。演技が終わったら、黙ってさっさと退場する。後ろを

見てはいけない。一方、聴衆はどんな場合も、クムセの道を横切ってはならない。一旦終わったら、ただちに黙って立ち去らなければならない。このいずれのタブーも破ったものは、死ぬと信じられている(Maelo 2014: 30-39)。筆者は以前に、前識字社会では社会・政治的過程が儀礼が分かちがたく結びついていて(脈絡化)、その中でも特に、権威・権力の関わる場所に、死とか病といった身体的な災いがついてまわる(身体化)が、識字が社会的な影響力をもつにしたがって、政治と儀礼が、「政府」と「宗教」というように分化し(脱脈絡化)、身体的な災いが政治過程からはずれて、「医学」の対象となる(脱身体化)、と論じた(中林 2016b)。この観点に立てば、マルティ氏のパフォーマンスは前識字的な身体化があるが、ベシ氏のそれは明らかに脱身体化している(ただし「体の乾湿」の観念はもう少し知る必要はある)。

さて、ブロックの第三点にある識字によって「社会的解離が起きなかった」というのは、筆者の「政治と儀礼に脱脈絡(decontextualization)が起きた」という立場と正反対のところに立っているようだ。この違いをもっと正確にみるために、その先にある「識字は社会の民主化を促さなかった」という部分から検討してみよう。これはグディ(とワット)が、古代ギリシャの民主主義の成立とアルファベット(子音と母音を書き分けるタイプ)の使用を、次のように結び付けたことに関係する……非識字社会でも文化的伝統を収集、分析、解釈する少数の人が勿論いた。それが表意的な文字を持った古代社会(エジプト、バビロニア、中国)になるとこの過程はいっそう進行した。しかしその文字は複雑で、読み書きができるのは一部の祭司や官僚のグループに限られた。前6世紀のギリシャは容易に読み書きできるアルファベットが広く流通したことで、さらに新しい事態が起きた。過去の伝統にとらわれることなく、自由に個人的意見を書いて挑戦する人々が輩出した。こ

うした「民主的」識字が古代ギリシャの他に類をみない政体を準備した (Goody & Watt 1963: 319-)。ここで、漢字は「非民主的」で、アルファベットは「民主的」という西欧的通念に乗った彼らの議論は、かなり偏っている。古代文化のこうしたギリシャ中心の見方をブロックが批判するのは、我々からみても当然に思える (実際、ブロックは日本の識字文化などを引き合いに出して批判している)。

問題はそれよりも、グディのこのアルファベット文化の前提とする識字と制度的変化の因果関係の設定である……記録が残されることによって歴史意識が生まれ、過去というものが現在と変わらないという恒常性の信念が失われた。そして、習得容易なアルファベットは識字人の勢力と影響力の増大を容易にし、結果として、社会の中に分裂を生み、階層化をもたらした。他方、こうした識字化は知識の細分化、社会の個人主義化をもたらした。……ほぼこうした筋立てで、西欧の民主主義の成立を説明するグディに対して、ブロックがマダガスカルは識字化で「社会的分離は起きなかった」、「社会の民主化を促さなかった」と主張するのは無理もない。というのは、筆者のみるところ、識字化の社会的効果は、この筋立てに含意されているような、識字化によって起こる個人の心的能力あるいは心的衝迫といった心理的影響よりも、テキストの社会的存在そのものの影響に依るからだ。この間のマダガスカルにおいても、「民主化」の促進はともかくとして、こうした観点からみれば必ず識字化の社会的効果は確認できるはずである。

つまりこうなる。前識字的社会が識字の影響下に入ると、そこでのパフォーマンスにはテキストへの従属がはじまる。それを個人的な手紙のようなテキストで考えてみると、その受け手は送り手の意図を勿論読みとることはできるが、それは一方通行であって、受け手が送り手にたいしてその意図や内容を質す

ことはできない。つまり手紙の読み取りという行為をパフォーマンスとみなすと、それは二人の対面的、言語的交流の状態にくらべて、社会的相互行為の脈絡が薄弱化したといえる。これが文学のテキストや音楽の楽譜になると、読み手や演奏者のパフォーマンスはテキストに対してより一層従属的であり、脱脈絡的である。

しかしそれはまだ個人的な嗜好の領域にとどまっていて、筆者の論点である社会制度的な脱脈絡化ではない。それが典型的におこるのは、規則や掟が標準化されて、テキスト化されたもの (つまり法令) においてである。裁判官と弁護人が、法令の条文や膨大な判例の下での裁判は、対象になる出来事 (たとえば犯罪) の個別的吗かつ広範囲な無数の状況から、条文や判例のテキストからみて必要な部分だけを取り出すという脱脈絡化が行われる。重要な点は、こうした識字制度の下では、裁判官や弁護人は識字人であるが、出来事にかかわった加害者や被害者は識字・非識字人にかかわらず、この脱脈絡化のプロセスに巻き込まれたという事実である。つまり、筆者のいう脱脈絡化というのは、識字人へのみ起こる心理的效果ではない。歴史上同様のことは、一団の識字的グループが主導した「宗教」において (経典、僧侶、教団、神学校、寺院)、多くの非識字人がパフォーマンスを通じて取り込まれた事柄でもある。

もうひとつの留意点は、同一社会においても脱脈絡化の度合いの違うケースがいくらかでもあることだ。たとえば現代社会でも「仲裁」という処理を選択する場合は、厳格な条文の解釈から一定程度離れることで、「裁判」にくらべて脱脈絡化の程度は明らかに低くなるだろう。このことは、おなじ識字社会でも、楽譜に必ずしも従属しない即興演奏が多くあることと同じである。

筆者は先に、政治と儀礼が分かちがたく脈絡化されている前植民地時代のサハラ以南のアフリカ社会の考察から、脱脈絡化された

「政府」や「宗教」、あるいはそれらを具備した「国家」さえも、定義的に識字制度として捉えられると論じた（中林 2013a、2013b、2014、2016a）。しかし言うまでもなく、文字さえあればそうした事象が成立するわけではない。それには物質的、人口学的な前提条件があるだろう。しかしそれさえも識字による知識の蓄積と対になっていたことは、ユーラシアの歴史が示していると思うのである。

【注】

- 1) 以下でブロックが批判の対象としているグディ論文は、初期のもので、かつワットとの共著（Goody & Watt 1963）であり、グディのその後の著作（とくに Goody 1986）とは論調に差がある。筆者が識字制度としての「宗教」と「政府」について書いた論文（2013a, etc.）は、後者の影響である。
- 2) 筆者のいう「半識字社会」の口承伝統の特徴については、グディもヨーロッパやアジアの古代や中世の「民間伝承」（物語詩、民間説話など）を「口頭・識字混合伝承」（あるいは lecto-oral tradition）として論じている。たとえば「イソップ物語」のような寓話について、「聞き手は表面的な字面のうらに隠されている意味を考えるように促される。これは明らかに識字文化の産物である。なぜなら口頭文化で通常に可能な以上に入念に考慮された検閲が、そこに施されているからである」という。（Goody 2010:49）

【参考文献】

- Bloch, M. 1997, *How We Think They Think*, Westview Press
- Finnegan, R. 1970, *Oral Literature in Africa*, Oxford, Clarendon
- Goody & Watt, 1963, "The consequences of literacy", *Comparative Studies in Society and History*, 5, pp.304-45

- Goody, J. 1986, *The Logic of Writing and the Organization of Society*, Cambridge UP
- Goody, J. 2010, *Myth, Ritual and Oral*, Cambridge UP
- Maelo, M. 2014, "The context and structure of funeral oratory among the Bukusu", *Journal of Humanities and Social Science*, vol.19 Issue 12, ver.III.
- Nakabayashi, N. 1982, *A Text of the Funeral Oration (Kumuse) in Bukusuland*, <http://hdl.handle.net/2297/3434>

- オング、W.J.、1992、『声の文化と文字の文化』、藤原書店
- スモール、クリストファー、2011、『ミュージッキング』（野澤・西島 訳）、水声社
- 中林伸浩 1993、「岡田光玉の言霊……語呂合わせと文字についての一考察」、『アカデミア』人文社会科学編 57号、55-96頁
- 中林伸浩 2009、「聖霊と精霊……アフリカ独立教会の霊性について」、落合雄彦編『スピリチュアル・アフリカ』、晃洋書房、1-26頁
- 中林伸浩 2013a、「アフリカの植民地近代性……「宗教」の侵入について」、永野善子編著『植民地近代性の国際比較』、神奈川大学人文学研究叢書 37、お茶の水書房、219-246頁
- 中林伸浩 2013b、「アフリカ植民地文化における儀礼と政府」桐蔭論叢 29号 47-53頁
- 中林伸浩 2014、「伝統的アフリカ文化と識字的な国家」、桐蔭論叢 31号、57-64頁
- 中林伸浩 2016a、「儀礼の識字化……M. フォーテスの祖先崇拜論にちなんで」、桐蔭論叢 34号、25-32頁
- 中林伸浩 2016b、「識字制度下の脱脈絡化と脱身体化」、桐蔭論叢 35号、5-13頁